

2018年度第2回学院モニター会議（2019.1.16）での主なご意見

◆「創立100周年に向けて」

資料の説明を行い、委員の皆様からの意見を聴取した。以下、主なご意見。

- ▶ 告知も含め、一過性のものでなく継続的なものがないのではないか。例えば前から少しずつ100周年と関連させたイベントを行い、当日を迎える等。
- ▶ ルーテル主催のスピーチコンテストをスタートさせる等、“今からのルーテルはこうしたい”というメッセージ性のあるものを企画する。
- ▶ 募金については、教育研究が深められるようなソフト面への基金の創設もあっていいのではないか。
- ▶ 「建学の精神」を軸にして、後世に残すものを引き継いでいく大きな節目としてほしい。
- ▶ 過去の資料を早く整理し、展示、刊行物等にした方がいい。
- ▶ 100周年にかかる予算は募金に頼るしかない。その為にも卒業生に働きかけ、積極的に動いてもらえるようにする。
- ▶ 私学の特色を活かしつつ、“何のため”、“何を残すか”を明確にする。
- ▶ 他で100周年を経験してみて今も明確に残っているものは、同窓会組織が出来たこと。いまだに募金の呼びかけもある。
- ▶ 幅広い世代の子供たちがいるので、何かを作っても皆で使えるというものがない。「私たちは一つ」という仕掛けが欲しい。それぞれの世代なりにエカード先生へのイメージを持つことができる機会となればいい。
- ▶ 100周年を契機に“ここから始まった”、“ルーテルの伝統”とするようなものがあれば、外部に対するメッセージにも繋がる。
- ▶ 歴史を知る必要性から、エカード先生のこれまでの経緯も押さえて頂きたい。
- ▶ 「ルーテルはひとつ」ということが実感できるような全員が集まれるような事があればいい。
- ▶ 100周年を迎える頃は、ルーテルの一期生が40歳位となる。のいばら会とルーテル生の過渡期に来ており、同窓会としても変革の時となるのではないかと。
- ▶ じかにエカード先生らと接した昔の卒業生や近隣の方々がお元気なうちに、聞き取りが必要である。
- ▶ 年々いい意味で変わってきている。自分が大きくなり、また回りが変わってきても、ここにルーテルがあるという存在感、そして変化していくことを外にも発信していくといい。
- ▶ 外部だけでなく、内部の教職員にも“建学の精神”をしっかりと知らせていく必要がある。
- ▶ 記念誌は、90周年誌という土台があるので、90年から100年までの10年間を充実させればいいのかではないか。
- ▶ 過去の周年事業の際は、学院が同窓会を必要とするような雰囲気になかった。今後は同窓会との関係をより強固にしていきたい。
- ▶ 同窓生としては、卒業生であるという魅力作りを心して繋がりを深め、仲間作りをしていきたい。
- ▶ 卒業生がどうやったら母校に愛着を持つか、例として、自分と関係のあることに繋げて結びつける仕掛けとして、全卒業生や旧職員にメッセージを送ってもらい、それをHPに載せて展開したり、在学生へのマイクメッセージをUPする等、“one Luther”を意識付ける。
- ▶ 若い人の意見として記念誌はその時だけであまり見ないという声もあった。これからルーテルに来たいという若い人たちの意見を聞いて、時代に合った周知、PRをしていく必要がある。
- ▶ 地域から学院に対する期待を踏まえ、本当にお金をかけるのはどこなのか、100周年に向け学院はどのような方向にいくのか、発信していく。
- ▶ 「学院はひとつ」の使われ方として、100周年に向け“one Luther”を実質化することも大事。
- ▶ 卒業生も、その「学院はひとつ」の中にいる。100周年をきっかけとして、卒業生を引き付けサポーターを増やさないといけない。
- ▶ 卒業生が学院を誇りに思えるように学院も変わる。
- ▶ 資料室の問題と合わせ、地元紙の熊日やニュースの活用、資料収集、PR方法等を整理していく。